



ベトナムとファン・ボイ・チャウ

ファン・ボイ・チャウ (1867-1940)

- ・紳豪層（前近代ベトナムの村落内知識人層）の家系に生まれる

- ・ベトナム民主主義運動の指導者

- ・東遊（トンズー）運動を興す

「おとなしくしていれば、有力者層出身だからフランスから優遇されたのでは？」



→ファン・ボイ・チャウを独立運動へと駆り立てたものは何だろうか。

ファン・ボイ・チャウの生涯①

1867年 誕生



フランスの同化植民地政策を目の当たりにする

1900年 郷試に合格 解元 (かいげん、科挙の成績1位) となる 同年父が死去



フランスの協同植民地政策を目の当たりにする

これ以降革命運動を本格的に開始

フランスのベトナム植民地政策 I

～19C末 「同化」(assimilation) : 植民地をフランスと一体化し、統合する

「適切な指導と教化を与えさえすれば、彼らをフランス人と同様の文明人に導くことができる」

しかし実態は.....

フランス国籍を付与されたベトナム人＝少数の対仏協力者

住民の大半はフランス市民としての特権を享受できなかった

フランスのベトナム植民地政策Ⅱ

20C初頭 「協同」(association) : 原住民に対する教化・啓蒙は一定水準に留め、固有の制度や慣習を尊重することによって彼らの協力を取り付ける

なぜなら.....

- ・熱帯植民地はフランス人の植民に適しておらず、同化する必然性がない
- ・フランス製品のはけ口、金融資本の投下先、必要資源の供給地としてベトナムを活用したい→効率的な植民地経営が求められる

ファン・ボイ・チャウの生涯②

1904年 同志を集め会(後に維新会と称す)を結成、トップにクオンデ(阮朝初代皇帝の長子の子孫)を据える

1905年 日本に援助を求め出国、横浜に上陸、梁啓超(りょうけいちょう)と出会う
彼の紹介で大隈重信や犬養毅らと知り合う 人材育成が必要とアドバイスを受け帰国 **東遊(ドンズー)運動**の下地に

1906年 クオンデ来日 1908年までに在日留学生は200人を超えたと言われている

1907年 **日仏協約** 日本に対し留学生の取り締まりを要求

東遊 (トンズー) 運動

- ・20世紀初頭に起こったベトナム青年の日本留学促進運動
- ・「東遊」=「日本に学べ」という意味
- ・留学生は東京で下宿生活を送りながら、日本語や武術、世界事情を学んだ
- ・1907年の日仏協約後は衰退

日仏協約

1907年 日本・フランス間で締結

この協約によって、フランスは日本における反仏運動の取り締まりの要求が可能になった

→日本は台湾・満州南部・韓国に、フランスはインドシナに対する権益を相互承認するため

→また、フランスにとってはアジア権益に対するドイツ侵攻への対抗として日英同盟を結んでいた日本と提携をしたかった

ファン・ボイ・チャウの生涯③

1908年 帰国者や亡命者が相次ぎドンズー運動頓挫 チャウも拠点を香港に移す
次にタイに移り そこで中国の革命のことを耳にする 香港に戻る

1912年 ベトナム光復会を結成

1913年 袁世凱（えんせいがい）の部下竜濟光が広東を制圧 軍隊に逮捕される

1914-1917年 三年を過ごす 獄を出たのちも活動を続ける

1925年 杭州から広東へ向かう上海でフランスの密偵に逮捕される ハノイへ送られ裁判で終身刑の宣告 抗議運動が国内外で起こり恩赦により釈放

1940年 フエの自宅で死ぬまで軟禁状態に置かれる

まとめ

ファン・ボイ・チャウは少年時代にフランスによる植民地化とそれによるフエ王朝の屈服(1883年)、上の世代の紳豪たちの抵抗運動の高揚と挫折を目撃している

→フランス植民地政策への怒りと屈辱

1905年～1908年に、中国の政治・思想運動や明治期日本の動向に強い関心を示し、そこから強い影響を受けた→世界の民主化運動に対する気づき

フランス植民地政策への怒りと屈辱、中国や日本の民主化プロセスへの気づきがファン・ボイ・チャウを独立運動へと駆り立てたのではないか。